



私は風呂に入った。風呂の中は深く深く底が見えない。私は沈んでいくしかなかった。温かくも、冷たくもない。哀しくも、嬉しくもなかった。暗い水の中、巨大な生物が私の身体を包み込み、泳いでいったような気がした。

私は大通りの真ん中に立っていた。塩の結晶を嗅いだときの匂いがする。あまり背の高くない建物が並んでいる。なんだか視界全体が青っぽく、水中に居るような印象を受ける。今は、明け方であろうか。人は疎らで街は沈黙していた。

五階建てほどの雑居ビルの頂上に、体長十メートル以上はありそうな、鯨が描かれた看板が乗っかっている。隣には、涸れた貯水タンクが肩身を狭くして座っている。私はぽつんと立って、昨晩見た風呂で溺れる夢を思い出した。私の傍らを通り過ぎた巨大な生物は、あそこのビルの屋上で固まったままの鯨と、よく似た大きさをしていた。

あの鯨だったのだろうか。

それにしても空が広い街だ。

「ここはね、水族館なの」

若い女の声がした。気が付くと私の左隣に二十歳手前くらいの女が立っていた。髪は男みたいに短く、身体は痩せている。

私は左目が弱いため、左側に人が並んでいても容易には気づかない事が多々ある。

「確かに」私は頷いた。「明け方の時間帯というのは、海か水族館の馬鹿に大きい水槽の中にも迷い込んだ気分になるくらい、綺麗に青いからね」

「何を言っているの、もうお昼過ぎよ」女はいぶかしげに言った。「いくら時差があるからって寝ぼけ過ぎてやしないかしら。時計を見る癖を付けた方が私は良いと思うけれど」

そうか。私は昨夜遅くこの街に着いたのだったか。長い間電車に揺られていた。乗ったが最後、永久に続くトンネルに参ってしまい、ようやくたどり着いたホテルで私は、ほとんど気絶するように寝入ったのだった。

「.....それじゃあ水族館というのは」

「そのままよ、そのまま。街は水族館なの、水の中にあるの」彼女は骨張った細い腕を上下させながら、吐き捨てた。

「そうかい、でも仮にこの真っ青な街が海底に存在すると信じるにしても、僕らは何で普段通りに息ができるのさ。人間は魚みたいにえら呼吸はできないはずだよ」私はまだ女が冗談を言っているのだと勘違いして、いくらか茶化した言い方をしたのだった。

「いい加減にして。そんなことも知らないでここまで来たっていうの、呆れるわ。あのね、人間が水中で呼吸できない時代はもうとっくに終わったのよ、人類は進化したの。酸素ボンベを背負わなくたって、ロボットみたいな潜水服を着なくたって、地上に立っている時と同じような呼吸が可能になったのよ。それはね、サランラップ——」

「サランラップだって」私は素っ頓狂な声を出してしまった。「サランラップが何をすると云うの」

「ええ、まあ。サランラップとはまたちょっと違うものなのだけれど、わたしたちの体を、酸素を含ませた透明なフィルムで密閉するの、水が入らないようにね。そのお陰でわたしたちはこんなにも身軽に水中で生活できるというわけ。その上、半永久的に使えるみたい、葉緑体がフィル

ムに織り込まれているから、光合成をして酸素を常に作っていてくれるの」と女は一気にまくしたてると、一つ大きな息をついた。

私は自分の手を触ってみた。なるほど、ビニール越しに物に触れたときのように、なんとも言い難い微妙な、鈍い感覚である。しかしそんなに都合よくいくものだろうか。私は今、このただ広い道路に易々と立ち尽くしていて善いものかどうか、よく分からないというのに。

「街に入るとき最初に説明されなかったのかしら、変な人ね」女は少し困った顔をして微笑んだ。痩せているのに案外健康的な笑顔であった。

「サランラップか、僕の街ではどこの店でも売っていたよ、店頭には山積みされてね。だけどいくら使い勝手が良いとしてもここまで便利なものだとは思ってもみなかったなあ、まさか夢の水中生活に不可欠なものだなんてさ」

「そうね」ふと、急に女は素っ気なく答えると、俯いてしまった。

「どうかした」

「……この街の方が、空が広くて好きよ」彼女はひび割れたアスファルトに視線を落としたまま、そう言った。

「僕もそう思うよ」

私も彼女にならって地面を見た。アスファルトに閉じ込められている砂利の一粒一粒が外に出る隙がないか窺っている。その証拠に、私の足下に走っている青黒い亀裂が女の白い足首を捕らえようと、一瞬自身の触手を伸ばしたところを私は目撃してしまったのだった。

「もしかして、僕が住んでいる町を知っててそう言ったの」

むらのない群青の空は驚くほど広かった。それだけでなく全てが青色の底で息づいているのだ。確かに私が居た町は酷く空が狭い。隙間なく立ち並んでいたどの建物も、おそらくはこの街全体より背が高いただろう。

「いいえ、知らないわ」微かに彼女の声は震えていた。

「そうか」

会話が途切れてしまった。アスファルトはまだ女を狙っている。女はまだアスファルトを見つめている。

私は気分を変えようと彼女を昼食に誘うことにした。蠢く砂利の執拗な視線にももうそろそろ耐えられそうになかった。

時間を忘れさせる青い景色のせいで、未だに現在が昼どきだとは実感できないでいたが、女は「そうね」と私の誘いを快く承諾してくれたのだった。幸いにも私の住んでいる町のことから話題がそれると彼女は元気を取り戻し、気味の悪いアスファルトとのにらめっこを中断してくれた。

「ところで、どこへ行けば美味しい海鮮料理にありつけるのかな」

私は女の華奢な肩幅を見ながら、訊ねた。

「……魚料理が主というわけではないわ。でも、とりあえずこの大通りは夜から開くお店ばかりだから、場所を変えた方がいいんじゃないかしら」

というわけで、私たちは今の今まで立ち尽くしていた地点からようやく歩き出した。彼女の言

葉通り、どこもかしこも閑散とシャッターが下ろされ、店内で誰かが身動きする気配もなく、看板のネオンも勿論、灯されていなかった。看板には酒を表す字が多く見られた。灯りのない街は染みだらけで、廃れていた。

雑居ビルに住み着いている鯨も夜になったら泳ぎ出し、街を散策するのもかもしれない、と私は思った。西部劇の舞台のように広いこの通りが沈黙しているのは、日が落ちた後の、華やかでだらしない時間帯に備えて眠りについているからだろう。

「この辺りは水族館の外れにあるの、だから今時分に人で賑わっている街の中心へは少し歩かなくちゃいけないみたいね」

さて私たちは青黒い大通りを馬鹿正直にまっすぐ進んでいった。女がそうすれば自ずと到着するだろうと言ったからだったが、他に道も見当たらず、街を知らない私の目にもこの道を辿れば中心部へ着くであろうことは、彼女の言葉に頼らずとも明らかだった。

呑み屋の一面は、いったい過去に一度でも電車が走っていたことがあるのかさえ疑われるほど、錆まみれになっている踏切によって終わっていた。そして朽ちた踏切を境目に、涼しげな並木道が新たに続いている。並木の外側はぼやけている。

その先には、アーケードであろうか、小さく口を開いているものが見える。あれが街の中心部への入り口だろうか。

丁度踏切を渡り終えた女の背中に私は問いかけた。

「もしや海底都市には、僕らが今歩いている大通りの一本しか道がないのかな」

遮断機の一部が欠けて、レールの上に置き去りにされている。彼女はその木片を躊躇なく踏み越えた。

「そうよ」と澄ました声。「トンネルみたいにね……まだ水族館の開発が完全じゃあないの」

女が振り返って私を見据えた。すると、彼女の濃い藍色をした髪の毛が柔らかく風になびいた。電気を帯びた水母の触手のように、毛先が光った気がした。

……………しかし彼女の髪は風になびくほど長くはなかったはずである。待て、水中だということに風が吹くなどということがあり得るのだろうか……………。

けれども女の後ろに連なる、枝を重そうに垂らした木々も、薄暮の冷たい風に吹かれるかのごとく揺らいでいる。

冷たい木々や彼女の瞳とは裏腹に、私は幻想の中、灯された口ウソクの鮮烈な炎の色を思い出した。

「一方通行なのね、時間の流れみたい。この瞬間わたしたちは踵を返してさっきの鯨が眠りこけていた場所まで戻ることはできるわ。けれど、もしかしたら今わたしが見ている景色、つまりあなたの背後に広がっているはずの世界は既に何もかもが消え去って、無が続いているだけかもしれない。あなたが見た世界は無くなってしまった後かもしれない、わたしの目にはもう戻る道など映っていないかもしれない、そう考えてみると面白くないかしら」

と女は実にゆっくりと口を動かしながら話した。

「……ねえ、本当にここは水族館なのかい」

「そうよ、だから進路に従って歩いていかないと、戻っていいのは全ての展示を見終わってから

」

自転車が並木道の真ん中を、土埃を巻き上げながらのろのろと走ってきた。人は乗っているが、私の集中力がまるで駄目だ。霧散してしまって、私の目玉は女の胸や樹の木目の端っこやどうでも良いような空間に移って、何も見えてやしない。

「あれは誰だ」

私が知るはずもないというのに。

女は既に歩き出している。私は立ち止まっている。

彼女の肩に触れるすれすれのところを自転車が通り過ぎる。鏡のようによく磨き上げられた、青く染まった自転車。彼女は気にも留めない。選択肢はないのだ。振り向いてはならない。

女は少しずつ遠ざかっている。私は足を速めた。

「ねえ」

目の前に春巻きが三本、青白い皿に乗っている。金色を帯びた竜が皿の縁を、火を吐いて飛んでいる。

「早く食べたら」

「ああ」

女は五目麺のようなものをすすっている。それが五目麺なのか、はたまたまったく別の料理なのか、私には判断しかねたが訊ねてみようという気は起きなかった。麺の入った汁物の丼には透明な膜が張っている。私が注文したらしい、春巻きの皿にもサランラップが被せてある。

「剥がさなくていいのよ。そのまま食べられるから」そう言って彼女は汁麺の膜に箸を突き刺した。

私も恐る恐る、女を真似て皿のサランラップに箸を突き刺した。少々の手応えがあり、膜に穴が空いた。春巻きを箸で挟んで持ち上げると、また少々の手応えを感じ、栓を抜くように青ざめた春巻きが外に出てきた。皿を見ると、膜は元通りに穴が塞がっている。青みがかった竜と目が合った。

「凄いな」私は思わず感嘆の声を漏らした。

「そんなことより早く食べなさいよ。冷えて水っぽくなってしまうわ。水中にいるってこと、忘れてないでしょうね。箸で搦んでいるそれは今、海水に浸しているのと同じことなのよ」

「え、ああ、そうか」

気怠そうに彼女が急かすので、私は焦って春巻きを丸ごと一本、口にねじ込んでしまった。私の口元を覆っているサランラップも同じように、始めに少しの抵抗があり、春巻きを通過させると元通りになった。唇は透明なフィルムによって、またもや硬く閉ざされた。私の喉も閉ざされた。これ以上、異物を口に入れたいとはどうしても思えなかった。

入り口の硝子扉から唸り声が聞こえてくる。隙間から入り込む風のせいだった。……また風だ。

店は地下にある為、窓がない。そのくせ店内の照明も青いのがだった。女の顔が深いマリンブルーに染まっている。

「なんだか、こう、どこもかしこも青いと食欲が失せてくるよ」

店は中華料理屋に特有の、不快なような、そうでないような臭いがこびりついている。

「ううん。でも、わたしはそれほど気にならないわ。厨房で何かを炒めている音だとか、早口でまくしたてる異国語とか、好きなのよね。お腹が空いてくる音」

けれども、いくら耳をそばだててみても、女の言う「お腹の空く音、というものが私には聞こえないのであった。

私たちの他にも数人客がいたが、皆食べることに夢中なのか、喋っている者は私と女だけだった。厨房さえ何の音も立てようとしないのはどうしてだろう。今居る客の注文はすべて終えたのだろうか。昼休みにでも入ったのだろうか。

音楽は流れていなかった。換気扇の回るしつこい音と硝子扉の唸り声とその代役を務めていた

。なんの気もなく、食後に本を読んでいる中年女が私の目に留まった。頬が痩けていて、目の周りが窪んでいる。中年女は、奥歯に詰まった食べかすを取ろうと、右の人さし指を口から出したり入れたりしていた。そして一通り口の中をいじり終わると、唾液でべっとり濡れているであろう人さし指を、今度は右耳の裏に擦り付け、仕上げに前髪を触るのだった。なんだか蠅みたいな奴だな、と私は思っていた。中年女は本の字を目で追いながら、神経質に際限なく、その行動を繰り返している。どうやら私の予想は違ったようだ。歯に詰まった食べかすを除去しようとしているのじゃなく、彼女の単なる癖の一つのようだった。

私は気味悪がりながらも中年女から目を逸らせないでいた。なぜ彼女はあんな蠅みたいな仕草をするのだ。狂っているのだろうか。（だが、狂っているにしては服装がまともだし、髪が乱れていたりするわけでもない。）あの落ち窪んだ目元、不眠を思わせる弛んだ肌。一体何が中年女を疲れさせ、蠅とも子どものおしゃぶりともとれる行動を起こさせるのだ。

「ああ。お腹いっぱい」女は満足そうに、異様に長い箸を丼の上に置いた。

中年女は彼女の明るい声に気付く様子もない。本に没頭しているのだろうか。やはり狂っているのだろうか。だけれど、誰が狂っているのか。誰が狂ってしようが、どうでも良いことではないか。私が見る現実が哀れな蠅女の現実と繋がっているかなんてわかりはしない。ましてや私の現実が現実かどうかなんてことも誰にもわかりはしない。

同じ場所に居るあらゆる人々の現実を並べ立て、外側から眺めることができたなら、いくつかの共通点が見つかるだろうか。きっと大した共通点は存在せず、わずかな数にしかならない。

ある二人の人間がある一匹の蛙を見ているとする。目が赤いと一人は思う、体が緑だともう一人は思う、それには間違いはないかもしれない。しかし一人が見る赤と一人が見る緑が、相手の見る赤と相手の見る緑と全く同じ色とは限らないではないか。私の知っている丸という形が誰かには私にとっての四角形に見えているかもしれない。私は誰かになったことは一度もないから、自分の眼でしか丸を見たことがない。

私は物を見つけることが苦手だ。大体は、一緒に物を探している誰かが先に見つけてしまう。しかも数分と経たずに。その上、私のすぐ近くや私が探した後の、見つからなかった場所で見つかることが多い。そんなとき、私が見ている雑多な物たちや愛すべき情景などは嘘っぱちなのではないかと思ってしまう。嘘ではないにしろ、日々、これは三角だね、これは熱いね、これは臭いね、と共有し合って生活を送っているが実のところ、人は皆それぞれの異世界に住んでいるのではないかと。

突然、見知らぬ腕が私たちの座るテーブルに伸びてきた。ことん、と静謐な音ともに湯のみが二つ、女と私の前に差し出された。中には綺麗な餡色をしたお茶が、と言いたいところだが、やはりその液体は青さに負けてくすんでいるのだった。

それでも私はお茶の温かさにほっとした気分になり、先の蠅女に捕らえられていた意識は無事、餌食とならずに自分のもとへ帰還したのだった。

しかし私が我に返った時には既に腕の持ち主は音も立てず、店の奥に入っていしまった後のよ

うだった。私は残念に思った。腕といえども、私を救ってくれたのだから。

周りを見ても、相変わらず他の客はせっせと何かを自らの口に挿入し続け、蠅女は蠅らしく読書などなどの行為に耽っていた。

「飲み物はこうやって、ストローを刺して飲むの」

湯のみにももちをん、サランラップが被せてあった。女は湯のみの膜にストローを刺すと素早くもう一端を口に咥えた。水中街一体に詰め込まれている海水が、口の中に入らないようにしている、と言ったところであろうか。

「こつが要るのだね」

「そうね。別にこの街の水が汚ってわけじゃないのでしょうけれど、味が混ざるのは避けたいところね。しょっぱいし」

「ところで、この後はどこへ行こうか」

「自然公園があるみたいだから、そこへ行きたいわ」

「じゃあそうしよう」私は立ち上がった。

「ちょっと、あなた、全然食べていないじゃない。こんなに残して」女は眉をひそめた。小さな眉間に可愛らしい皺が寄っていた。

「いいんだ。今はあまり食べる気がなくて」

「.....本当に。いいわ。行きましょう、もったいないけれど」

私と女はごうごうと泣き続ける扉の前に進み出た。

「すみません」私が店の人を呼ぼうとすると

「いいの」と彼女が遮り「お勘定、置いておきますから」

女は会計台の上に丸いものをいくつか置いた。水色の（もしくは透明の）平べったい、おはじきに似た石だった。

「行きましょう」

彼女は重い扉を勢いよく押し開けた。驚いたような声を上げると、扉はそれっきり唸るのをやめてしまった。

私たちは暗い地下の階段を上った。地下というよりは、陰気くさい団地の階段を上っている、そんな雰囲気であった。

「あの石は、お金なのかい」窮屈なコンクリの階段をすいすい上っていく女を見上げながら、私は訊ねた。

「あら、あなたも持っているはずよ。財布の中でも探してみたら」

私は尻のポケットに入っている財布を取り出し、中を見た。（実は、財布を持っていることさえ忘れていた。とはいえ財布をポケットに入れた記憶はなかったのだが。）小銭の代わりに、さっき彼女が会計台に置いていた石と同じものが数個入っていた。財布はというと、私の使い慣れた茶色い革財布ではなく、見知らぬビニール製のものになってしまった。

「これじゃあ、区別がつかないな」私は小銭入れの中の同じ形、同じ大きさの石を一つつまみ上げて言った。

「当然。十円一円とか一セントドルとか、お金の階級がないのよ。お札もないわ。価値はその

石が何個必要か、で決まるの。だから売り物の値札には何千円じゃなくて、石が何個と書かれてそこら中にぶら下がっているわ。でも大抵は、一つの物を買うには石一つが基本みたいね。あなた、本当になんにも知らないのね、感心するわ。もしかして、なぜこの街に来たのかさえ知らないのじゃないかしら。そうなの？」

「そんなの誰も知りやしないさ」

私がそう言うと女は笑った。冗談を言ったつもりはなかったのに。

広告

地上に出た。（海底と言うべきか、なんというべきか。）中華料理屋よりは人工的な青さではないにしろ、外も中も少しも変わらず空は真っ青なのであった。外、つまり街の中心部では、人が多く行き来していた。溢れ返るといっほどではないが、この街はそれなりの都会で人気があるらしかった。しかし夢の水中生活を実現した世界初の街なのだからもっと観光客が歩いていても良いものだが。

「思ったより人が少ないな」と私は呟いた。

「だってまだ六月だもの」彼女はおかしそうに言った。「観光に来るような時期じゃないわ。あなたやわたしと違って、世の勤め人は暇じゃあないのよ」

「そうか、そうだったね。やっぱり君の言う通り僕は酷く寝ぼけているみたいだ。自分でも心配になってきたよ。ついでに訊くけど、今日は六月の何日」

女は心配そうな眼差しになって「大丈夫」と私に訊ねた。「〇〇日よ」

.....〇〇日。そんな日にちがあっただろうか。いや、あったような気がする。

「そう、〇〇日か。じゃあもうすぐ、あと数週間で七月になるのだね」

「そうよ。七月に入って夏休みの時期になれば、街ももっと活気づくはずよ。夏祭りもあるみたいだし」

「それは楽しみだな」

「さあ、早く公園へ行きましょうよ。日が暮れてしまう」

「今は何時だい」

「三時よ.....あなた、もう平気よね」

「うん、大丈夫」

アーケード街を歩いて行くと、街灯が規則正しく灯されていた。青くない。単なる白熱灯がこんなにも私の眼に新鮮に映るとは思ってもみなかった。街は夜のような明るさをしている割には、健全すぎる人々の顔ぶればかりであった。玩具屋のショウウィンドウには永遠とお辞儀を繰り返す、硝子でできた鳥が居る。気が向くとコップの水に紫のくちばしを浸ける。けれどもコップは空っぽ。シルクハットを被って、愉快的な奴だ。彼の首には値札が下がっている。値札には丸が一つ書かれている。

「いつまでも仄暗いせいで夜みたいだね。夜だというのに、子どもが多いし、酒を飲んでいる人はほとんど居ないから、違和感を覚えるよ」

「そう。わたしには十分明るく感じるわ」

女は私の左側に並んでいる。

「いや、電気の明かりのことじゃなくてね」

「でも、ここは水族館だもの。水族館って年中薄暗いものだわ。そうでしょう」

「まあ、そうなのだけどさ」

魚が泳いでいないのじゃあ水族館とはいえないよ、とは言い出せなかった。玩具屋の真摯な鳥もさぞかし腹を好かせていることだろう。鳥なら、水よりも魚を食いたがるはずだ。

「自然公演はもっと先にあるのよ」彼女は私の顔をちらりと見やり、期待のこもった声音をした。

その声は若々しい雑多な音に混じって、ドーム型の天井に幾重にも反響した。

「楽しそうにしているね」

「そうかしら。寧ろ緊張しているくらいだけど」

ドームは格子柄になっている。空が青いのか、天井にはめ込まれている硝子が（例えばステンダグラスのように）、青いのか、最早私にはよくわからなくなっていた。

あらゆる音が天井に突撃しては花開くように散っていった。その残留物が私の耳に降り注ぐと、たちまちもの凄い速さで駆け抜けていくのだった。

そう、たちまち。たちまち私の耳は潰れてしまうだろう。商店街を闊歩しているどんな人だって例外ではない。この上、夏祭りが始まったらどんな騒ぎになるか。人々の奇声や楽器の奏でる音、何かが破裂する音、私の知らない音、何でもお構いなしに、そこに在る全てが螺旋を描き、やがては半円の一番高い所を突き破るだろう。硝子という硝子は粉々に、反響する音たちと同じく碎け散るのだ。

そうになってしまえば、もうなるようにしかならない、。私たちの視線は硝子の雨に向けられ、それが最後に見た光となる。つまりは盲聾者となるのだ。そして、筒型をした祭りのパレードの一行は、この小さな水族館に終わりがあるとは知らされぬまま、いつまでも走り続け、暗闇へと落ちていってしまう。ちょうど玩具の電車がなんの疑いも抱かずに机から落ちていくみたいに。

はて、私は何故こんな想像を巡らせているのだろうか。くだらない、冗談みたいな妄想を。私は好んで夢に耽るような人間だったろうか。日頃私は何をして過ごしていたのだったか。何を習慣にしていたのだったか。

どうもこの幻想的な水中都市に来てからというもの、自分自身があやふやになっているようだ。その上、集中力が異常なほど欠けている。現に私は目の前の壁に貼ってある広告を先ほどから眺め入っているが（しかも、まじまじと。だというのに）、全く何が書いてあるのか頭に入っていない。小さな人型が、子どもだろうか、丸い物体から垂れ下がっている糸を握っている。風船。人型をした者の足の裏がこちらを向いている。子どもが風船を持って空に浮かんでいる絵である。足の裏のすぐ下に大きく飾り文字が刷られている。どうやら映画の広告のようだが、なんとという題名だろう。〇〇〇〇監督の『〇〇〇〇』という映画らしいが……。

さて、なんと題名だろうか。『〇〇〇〇』という字や意味をどうしても忘れてしまう。あら、と忘れていることに気が付き、再度広告を見ると、ああそうだ、と納得するのだが、目を離れた際に『〇〇〇〇』が何かわからなくなってしまうのだった。

それから今日は〇〇日だが、〇〇日とは何日か段々疑わしくなってきた。

咄嗟に、そうか、映画を見ればいいのだ、と私は思った。これはなかなか良いひらめきだ。広告が貼り連ねられている瑠璃色の壁は、とても背が高く、中身が病院か刑務所でもなんらおかしくはない外観であった。私は扉の中に入っていった。門は無かったと思う。確か、ちょうど良く扉が途切れている部分があったのだ。

とにかく私は中に入っていった。すぐに受付がある。カプセル型のアクリル箱に人が入って

いる。とても細長い男。カプセルとお似合い。私はその男から、紙を手渡された。チケットだ。私は財布から例の透き通った石を一つ出して彼に渡そうとした。カプセルから男の手が、細長い腕に大きな掌が、突き出された。私は彼の掌に石を乗せた。男は慇懃に手を引っ込めた。顔は夕暮れの影に隠れて見えない。

周りは燃えている。辺りは太陽の哀しい炎に包まれている。私はカプセルの背後で待っている木造りの扉を押して映画館へ入った。

映画はもう始まっていた。淡い色の映画だ。色はあるのにモノクロ映画のようだ……十歳くらいの少年が家に帰ってきた場面だった。私は申し訳ない風を装って、ごめんなさい、と断りながら未知の膝小僧を押し分け、押し分け座席に腰かけた。後ろの方の席だった。私が座ったことで満席になったようだ。暗がりであったが何故かそう確信した。帽子を被った影や無帽の影が幾層もできていた。皆、身動き一つしないでスクリーンを見ている。

画面の中の少年は家に帰ってくると急いで靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、走って母親と祖母の居る居間へ向かった。居間には大きな窓。午下がりの陽光が庭木の葉を透かして入っている。緑色の、心なしか陰鬱な居間。少年は自慢げに「ただいま」と叫んだ。母親と祖母は応えない。二人とも俯いてじっと考えに耽っている様子。俯いているせいで彼女らの鼻から上は陰っている。少年は、テーブルを前にして行儀よく椅子に座っている祖母に駆け寄り「今日は〇〇をしたんだ」と実に楽しそうに学校の話をはじめた。祖母は俯いたまま、声を発しない。白髪まじりの灰色の髪の毛が妙な近さで映される。

少年は一通り話を終えると、今度は母親の隣に駆け寄った。母親は窓辺に立って外を見ている。少年は「今日の夕飯はなあに」と母親の腕を掴んで、急かすように彼女の腕を揺らした。腹を空かせているのだろう。やはり母親も屈託のない少年の問いかけに答えない。母親の黒い、癖のある髪の毛が妙に近くで映される。

少年の顔。彼は嬉しそうに笑っている。居間の全体が映される。しばしの沈黙。またしばらくすると、少年が走り出し、画面から切れる。すると祖母と母が示し合わせたように、それぞれの習慣に戻っていく。

少年はそれからも家族に無視され続けた。しかし、彼は悲しんだり怒ったり、絶望したりする様子もない。家族に詰め寄って、「どうして」と訊くこともしない。彼はいつでも笑っていた。少年はいつも幸福そうであった。充実した輝く毎日をおくっていた。

そしてある日、少年はずいぶん前に母に遊園地で買ってもらった風船を、自分の玩具箱から取り出す。近所のおじさんに萎んだ風船を膨らましてもらう。生き返った風船を目の前にして彼ははしゃいだ「遊んでくる」と走っていったのを最後に、少年はこつ然と姿を消してしまうのだった。

ラストには、少しずつ遠ざかる、少年の存在しない、彼の為にあった町や家が映されて映画は終わった。なんてことない。とても静かな冬のようにあり、夏のようにもある、日常的な映画だった。

スクリーンが黒くなっても照明はおとされたままだった。誰一人席を立つ者はいない。私は一人、映画館を後にした。辺りは赤々と燃えている。

公園

「着いたわ」

私は見た。

「〇〇よ」

「え、〇〇」私は聞き取れなかった。

「お墓よ」

炎は冷えた。世界はまたもや青い。

「ああ。本当だ」私は胸を撫で下ろした。

「自然公園と銘打っているみたいだけれど、実際はお墓ばかりね。これじゃあ、あまり生きている人間は遊びに来なさそうね。」女は溜め息まじりに言った。

徐々にはっきりしてきた。芝生の上に青灰色の墓石がちょこちょこと立っている。どれもこれも手入れがされていない。ましてや花が供えられている墓など一つもないのだった。それにしても、この墓石の下には何の死体が埋められているというのか。海の底で、つい最近まで人間が立ち入れなかった深海で。そしてなぜだか、芝生だけは手入れがしてある。じっくりと観察したわけではないが、綺麗に背の丈が揃っている、いやに黒々とした芝がそこには生えていた。

寧ろ、その可愛い芝生たちを気の向くままに観察していたなら……私は思いを巡らせた。彼らはいたずら心を起こして、私を驚かそうと爆発的な成長を始めるだろう。彼らのわずかな背丈はよきによきと女や私を追い越し、更には天のような海面をも突き抜けて、とうとう陸へ上がってしまうだろう。

初めて地上を目の当たりにした芝生たちはどんなことを思うだろう。第一声に「変わらない！」と言ったとしたら。私はどうしたらいい。海底も地上も大して変わりはないと言われた日には。私は一体どこへ行けばいい。どこに安らぎを求めればいいのだ。だから私は芝生をよく見てはならない。地面を見てはならない。気を許してはならない。靴の裏から伝わる植物や大地の柔らかさに囚われてはいけないのだ。

ずいぶんと広い公園だった。私の町にはこんな余白は残されていない。森を一部切り開いて公園は作られているらしい。墓石と芝生が立っている空間はマンションを一棟建てられそうなほど。そしてその外側を、薄く水銀を塗ったような藍色の針葉樹が鬱蒼と私たちを取り囲んでいた。

「ねえ、この土地全部が公園なのかい」

左を向いたが女は消えていた。私が呆気にとられている隙に彼女はまたそそくさと先へ行ってしまったらしい。木の影に隠れる寸前の彼女の姿が斜め前方に見えた。

木々がさらさらと枝葉をしならせ風に揺れている。少し肌寒い気がした。もちろん気のせいであろう。私たちは見えないコートを羽織っているのだし。私は女のあとを追って森の中へ入っていた。

静かだった。あの幸福な少年の映画とはまた違った静寂であった。なぜなら森は幸せや不幸せとは無縁の世界に息づいていたのだ。森の中は一層深い群青の底に沈んでいた。殆ど暗闇と言ってもよかった。小鳥の羽ばたきも、さえずりも、また、葉が落ちる微かな音さえも聞こえては来

なかった。私の不器用な足が、地面に寝そべる小枝を踏んだ感触があったが、その枝はたくましくも折れることはなかった。

女の足音もしなかった。お陰で彼女が何処にいるか分からない。さほど彼女と離れてはいないはずだが。

少し進むと、根を腐らし寿命を終えた樹木が私の行く手をを阻んでいた。私は、人知れずに朽ちていくその静かな者を跨ぐため、まだ遥か高みに背筋を伸ばしている、若い針葉樹の幹に手をついた。柔らかいものの内部に埋もれる感触があった。と思うと次の瞬間にはささくれ立った硬い樹皮を触っていた。生えている木々の一本一本にもあの便利な被膜が備え付けられているのだろうか。

私は埋もれてしまった腕を抜こうと、力任せに右手を引っ張った。右腕は案外易々と抜け出てきた。しかし勢いよく引き抜いたせいか、樹を覆っていたフィルムが一部、千切れてしまった。破れたところの被膜が海藻を真似て私の腕にまとわりついた。引きはがそうとすると更に上の方までフィルムに亀裂が入った。裂けた被膜は、吹くはずのない風によって大きくはためくと、私の喉元を優しく撫でた。息が苦しい、と樹が私に助けを求めているのか、それとも不意に命綱を断ち切ってしまった私を憎んでいるのだろうか。けれども、大変心苦しいことに私には彼の声が届かなかった。

私は残酷にも、歩くことのできない針葉樹を見捨てその場を立ち去った。彼は枯れてしまうのだろうか。だけれども私にはどうすることもできなかった。

「おおい」と女を呼んだ。大して声は出していなかった。

「なに」応答が鼻先の辺りから返ってきた。

「なんだ、近くにいたのじゃないか。脅かさなくてくれよ」私はわざと声を低くした。

「なあに、その気に障る言い方。わたしがどこに居るかくらい足音でわかるでしょうに。真っ暗ってわけでもないし、ただでさえ静かなのだから」今度は真後ろから返事がきた。

「やめてくれよ、僕は眼があまり良くないんだ。特に暗いところだと尚更ね。お陰で樹を一本殺してしまったよ。それに、君が歩いてる音なんてこれっぽっちも聞こえなかった」私はいくらか声を荒げている自分に気が付いた。

「怒らないでよ。別にからかうつもりはなかったの、ごめんなさい。樹を殺したって、それはどういう意味なの。それにしても、足音が全く聞こえないなんて変ね。わたし、尾行の才能でもあるのかもしれないわね」

ということは、彼女自身には自らの足音も、私の足音も聞こえていたのだろうか。

「もうどこにあるか見分けがつかないけれど、どこかの樹の被膜を破ってしまったんだ、僕は自分の眼の軟弱さを憎むよ……だってこの街全体は水の底にあるのだろう、それなら足音がするはずじゃないじゃないか」

しかし足音を意識したのは森の中に入ってからだった。これまではどうだったのだろう。心当たりがないということは、普段通り、地上で過ごしているときと同じように足音がしていたのだろうか。わからない。

「それもそうよね、あなたの寝ぼけがうつっちゃったのかしら。樹に関しては、平気よ。少なく

ともこの辺りの針葉樹は存在する限り死んだりしないわ」と言うと女は黙った。

存在する限り、とはどういう意味だろう。

「でも」私は言い返した。「さっき、倒れている木を見たよ」

「それは違うわ。寝そべる木は地面に吸収され、森の栄養となる。新たな種となり、芽となる。死んでやしない」女は胸の前で掌を合わせると神妙に応えた。

「それが死ぬということだろう」私は腕組みをした。

彼女は首を振った。「いいえ。人間には死んだように思われるかもしれないけれど。生きていると言った方が当てはまるわ」

「どうして」

「だってそうでしょう。栄養となるなら、存在が消えることはないじゃない。確かに、一本の木ではなくなるけれど、何かの一部となって循環する。生き続けるのよ」

「それじゃあ、僕たち人間が息絶えた場合は死んだと言えるわけだね」

「人間だって一緒よ。変わらないわ」女は当然と言う風に私を見つめた。

「そうだろうか。魂はどうなるの」

「魂も、広がるの。色々な物に宿るの」

「納得いかないなあ。やっぱり僕には死ぬことと同義に思える」

「その気持ちはわかるけれど、あなたにもいずれはわかるはず。存在する限り。それより、先へ行きましょう」

私にはわかりそうにもなかった。

「.....それで、先へと言うけれど、君はどこへ向かおうとしていたの。僕の目が悪いのは分かっただろう。また他の樹を駄目にしたくないから、案内しておくれよ、そうだなあ、はぐれないように手を繋いでくれないかな」

私は彼女の手を探った。愚鈍な我が腕は空を切るばかりだ。

「わかったわ」

女の手がそっと私の左手を握った。彼女の手はしなやかで冷たかったが、どうしてもか実体がないような気がした。

「このまま歩いていくと、さっきの墓地みたいに開けている場所があるの」

「そうか、じゃあ行こう」

私と女は歩調を合わせて歩いた。女は今までも今回も私と並んで歩く時は左側に立つのだった。私の目を気遣ってくれているのか、それとも、あまり私に見られたくないのだろうか。

彼女の手を握ったとき、私自身の奥深くに根付いているある感情が喚起されるのを感じた。ごくありふれた、親しみのこもった感情である。私が生きていく限り触れ続ける何か、例えば夢の世界に入る瞬間の心地よさのような、そんな感情、感覚。

ひょっとしたらこの女は私の恋人なのだろうか。そういえば名前さえも知らないでいたのだったが、彼女の方も私の名前を訪ねもしないし、呼びもしない。寧ろかなり以前から私を知っているような口ぶりで彼女は話していた。そう、初めからなのだ（初めというのはあの閑散とした呑み屋の通りのことだ。）けれども私と女の始まりとはいつのことだ。`以前、とはなんのことだ

「ねえ、君は僕の恋人なの」

六月〇〇日、〇〇〇〇監督の『〇〇〇〇』。

女は思案するように言った。「恋人ねえ、それでも構わないけれど、まあわたしは観光に来たあなたの道案内役ってところかしら。あなたもさっきそう言ったじゃない、道に迷ったら可哀想でしょう」

道に迷うと言ったって、大通りが一本しかない単純な作りの街のはずではないか。迷いようもない。

左を向くと、目を伏せた、哀しそうな女の横顔がぼうっと浮かび上がっていた。それは何かを諦めた表情でもあった。

「ほら、見えてきたわ」

針葉樹たちの暗い影の先に、青い光が立っていた。私たちが待っているのだ。その光は近づくにつれて粒子へと分解され、女と私の頭部を始め、手足の爪の先、産毛の一本一本まで降り注いだ。そしてなんの他意もなく、その上易々と私たちの身体の中にまで（密閉されているのにも関わらず）侵入してくるのであった。

群青の粒子が私の体内に吸収されると、真っ暗闇だった私の内部に一本のロウソクが灯されたのを感じた。それは「泣き出したいほど満ち足りた気持ち、の炎であるらしかった。私の身体がそう呼んでいた。そう呼んでいるのが聞こえたのだ。

針葉樹林を抜けたとき、女が息を飲む音が聴こえた。私の耳の内側で、彼女の息づかいが幾度も回想されこだました。また、そのこだまが段々と激しく、心臓の脈打つリズムと結びつくと、やがて爆音へと移り変わっていくのだった。

「……………」私はたちどころに忘れ去られた何かを言った。

女は心から声を上げて笑った。彼女が自身の大きな瞳を自力で細めると、目尻に微かな皺が出来上がった。まつげの先端が青く発光したのを私は見逃さなかった。

「なんだか、ずいぶん大人びたみたいだ」

「どういうこと」女はまだ笑い足りないという喋り方をした。

「僕は今まで君のことを十代だと思っていたのだけれどね」

「あらまあ、これでも成人してから数年は経つのに」

女は我慢できずにまた笑い出した。しかし、たちまちまた元の息を飲んだ表情に戻っていた。

そうだ。針葉樹林の最後の幹を超えた先には、湖、いや巨大な陥没が口を開けて佇んでいたのだった。涸れてしまった湖の残骸が。

窪みの畔で生い茂るままに伸びた雑草は濡れたような光沢がある……事実、濡れているのかもしれない。地中から沸き立つ、湿った匂い、この匂いだけは途方もない現実感を伴って、私の元に訪れた。彼らは確かな歴史をもって固く存在していた。この匂いが私の元にやってくると、私はすぐさま彼らを気に入った。けれども、また同時に、寄る辺のない気持ちにもさせられるのであった。どうしてなのかはよく分からないが、途方もないという感覚と寄る辺ないという感情は密接な関係にあるからなのだと思う。多分、この二つは孤独というものに繋がっているのだろう。

私と女は病的に青い雑草たちを踏み倒しつつ、窪みのすぐそばまで歩いていった。なだらかな穴へ落ちるぎりぎりのところに私はしゃがんだ。

彼女は立っていた。点ほどの白っぽい虫が無数に、蒼ざめた草むらの町を飛び交っている。遠くを眺めると、窪みの向こう岸にはトタンを繋ぎ合わせたあばら屋が身を潜めていた。

「あの小屋はなに」

彼女は答えなかった。

私は巨大クレーターの底を覗いてみた。よく見えない。それが何かは判別できなかったが、クレーターと同じくらいに巨大な黒い物体が緩やかな谷底に横たわっているということだけは分かった。群青が支配する森の奥で、唯一彼だけが青色に侵されていなかった。私は懐かしさにのしかかれて、頭が重くなる思いがした。だけれども私はあの黒い物体に会ったことはないはずだ。郷愁、ノスタルジー、私のそういったものは出所が分からない。故郷がない。無意識の思い込みからくる、安っぽい感情なのかもしれない。こりゃあなんだか趣が良いな、と感じるとすぐさま懐かしいという感情に歪曲してしまう機械が頭の中に設置されているのかもしれない。

黒い物体は物憂げに沈黙している。小さな虫も、名もない草や色を持たない花々も、そして、私の目に見えない、森に潜む怪しい生き物たちも。今や、不気味なまでに青く透き通った静寂が悲鳴を上げていた。その中で黒い影は、巨人でさえもその長さには届かないほど、偉大であった。

女は茫然自失に立ち尽くしている。彼女は、ただただ正面の方を向いているばかりだった。

このとき初めて私は、彼女が肩から地面まである、長い濃紺のスカートを身につけていることに気が付いた。まるで夜空を身にまとっているようだ。柔らかく揺れるドレスの裾に見入っていると、遙か彼方に存在している惑星たちの光が、点々と現れ輝きだすのだった。

「さて、そろそろ行かないと遅れてしまうわ」女はクレーターの向こう側を見据えたまま、無機質に呟いた。

と、彼女はドレスで隠れたつま先を一步、前に出した。

「おい」

女は二歩目を踏み出す。夜空が波打ち、尾を引いた。彼女の足はどこへ行ってしまったのだ

ろう。軽やかに巨大な窪みの上を滑っていく。あろうことか、女は空中を歩行していた。

「何してるの、早くして」

私を見ずに女は言った。ドレスの裾はどんどん伸びている。

「だって」私は躊躇した。「そんな、神様みたいなこと僕にはできないよ。奇跡を望んでいるわけでもない、単なる人間だということに」

ため息をつかれた気がした。

「この大きな凹みにもね、膜が張ってあるのよ。あなたが何度も驚いているあれよ。窪みの底の黒い奴を大切に保管するために、皺一つ残さず綺麗にサランラップで閉じ込めておいたのね。きっと、もうさすがに中身のご飯は干涸びて、固まってしまっているでしょうけれど」

「それが、手品の種よ」と女は私に聞こえるよう、大声で言った。

というのも、彼女は既に畔から遠ざかりつつあったからである。

「穴が空いたりしないかな、さっきの木みたいにさ」

しかし、仮に穴があいたとしても、（何度も念を押しているが）ここは水中なのだ。怪我をするような沈み方はしないだろう。ああ、けれど、どうして私は窪みの底から這い上がることができると過信しているのだ。泳いだからといって、上昇できるわけではないのだ。

「平気よ、穴が空くよう柔軟には作られていないはずだから。私たちの体にくっついているものとは使い道が違うのだし、だけれど、もしクレーターの底に落ちてしまったら、あの黒いのに食べられちゃうかもしれないわね。きっとお腹を空かせているわ」

「そんな」と私は情けない声を出した。

「嘘よ」女はいたずらっぽく笑った。（顔は見えなかったが。）「確か彼は肉を食べない主義だったから。第一、今じゃミイラよ」

彼女は指をさして「あの小屋に用事があるの」と叫んだ。

私は足を出した途端に滑り落ちてしまうだろう、空っぽの部分につま先を乗せた。やはり、つま先は弾力のある物質にぶつかるのであった。全ては女の言う通りになってしまう。なんだか悔しそうに、私の靴は不平を漏らしていたが、つま先から伝わる反発に私は勇気を得て、思い切って足を踏み出した。

ほんのつかの間、落下する感覚に襲われるも、それは明らかな錯覚だった。私は見事、空中に立つことができたのだ。こめかみの辺りに汗が滲む。それでもなお私は私自身を信じられず、不安にみぞおちの内部がぞわぞわと粟立っていた。気を抜くと真逆さまに落ちてしまうのではないかと。

眼下には正体不明の影が依然、横たわっていた。

私は、ただでさえ分厚い影の更に上方を歩いている。なんたる透明さだ。どのくらいの高さなのだろう。それに、私はこんなにも臆病だったのだろうか、こんなにも体が熱くなる性質だったのだろうか。

こんなに高いのじゃあ、めまいを起こしそうだ。

「早くして頂戴」

女はどうやら向こう岸に着いたらしい。私は息が詰まって返事もろくにできず、仕方なく苦笑

いを浮かべた。今更ながら、なぜ彼女はあんなに急いでいるのだろう。

「下を見るから怖いよ」と彼女はまた叫んだ。きつい物言いではなかった。

「だけど、足下が不安定で、どうしようもないんだ」私も叫んだ。

足の下敷きになっている、見えない壁は、私の体重の分だけ下方に凹むのであった。右脚に重心が移動すると右側が沈み、左脚は上に向かって跳ね返されるので、歩きにくくて仕方がない。

「トランポリンの上を歩いているみたいだよ、馬鹿みたいだ。拍子抜けしちゃうな」

「それはお気の毒ね」彼女はあまり関心がなさそうだ。それがどうしたという風であり、子どもに言い聞かせるようでもあった。

向こうで私を待っている女は、大人びたばかりか、今では私より年上ではないかと思われるほど落ち着き払っている。いつの間にかこの森や街と同じ、海の底に居るような、愛情深い女性に変化していた。いくら私が、集中力が散漫で、未だ目覚めていない夢遊病者であったとしてもだ。彼女の変化が、私の女に対しての心境の変化だとか、女自身の心境の変化よるものだけとは言い切れなかった。

彼女はもの凄い速度で成長し、老いているのではないか。彼女曰く、二十代を数年過ごしているそうだが……。今日初めて見た時の彼女、鯨の看板の下に居た彼女の青白い顔は気楽で、声は弾んでいた。しかし夕暮れを前にした彼女は、洗練された身のこなし、表情をして何かの使命を果たそうとしている。

夜風を含んだ彼女の声は私を眠りの中へと誘惑する。

私は天を仰いだ。いつでも空は広かった。セロハンの青を透かした濁りない海がいつまでもそこに在った。トランポリンを利用して海上まで跳ね上がったとしたら、そこにあるのは、変わらぬ日常。芝生たちが教えてくれたように、どうにもならない日常が、足取り軽く往来しているのだろうか。

そうして私はようやく巨大な穴を渡りきったのだった。

「はい。おつかれさま」

地面の確かな固さが足裏から背骨に響き渡ったところで、私は安堵した。足下を見ると、私の古ぼけた靴が女のドレスを踏んでいた。女に謝ろうと口を開きかけたが、「さあ、中に入って」と彼女に先手を取られてしまった。私はドレスを踏んだままにしておくことにした。

もう一度、夜空の裾を見たとき、裾のきわの辺り、つまり地面と布の境界が、滲んでいることに気が付いた。夜のドレスはじわじわと地面を浸食していたのだった。

私たちは錆だらけで朽ちかけているトタン小屋に入った。床の一部が剥がれてそのままになっている。

「ああ、やっと着いたわ」女は小屋に入るなり、そう言って伸びをした。「意外と遠かったわね」

私は静かに戸を閉めた。何とも鉄臭い。つぎはぎのトタン板の内側は心なしかいびつだ。長い間この小屋に留まっていると、いつしか自分の身体や思考にも錆びが現れ、ひとつなぎだと信じていたはずの何かが、ほころびだらけの下手なパッチワークへと様変わりしてしまう。そんな空間だった。

女と私は暫く黙っていたのだと思う。彼女が呼吸する度毎に、擦り合わされる濃紺の繊維の音、微かな音だ。それが私の耳の奥で記憶されていた。

「電気、つけるわね」と言った彼女の声が、久しく聴いていなかった馴染みの楽曲のようでもあった。

小屋の内部は橙色に染まった。天井から吊り下がっているランタンが、きいきいと鳴きながら揺れている。ランタンに灯された明かりと一緒に、仄暗い影のグラデーションも振り子運動を始めた。

トタンでできた船の中で私たちは、どこへ行くとも知れず波に翻弄されている。丸い窓の向こうは暗黒に包まれ、空と海の境は消え失せてしまった。

……………暗黒？

「ほら、見てよ、ずいぶんと古いカレンダー」と女は感嘆して言った。

波打つ壁に薄茶色の紙が掛かっている。しかしながら私は、当然その紙面になにが印刷されているのか、文字の一つ一つの意味を理解できずに忘れてしまう。

女は、男はシチ月に死んだのだ。何故なら暦はシチ月の頁のまま放置されているのだから、と云った。

男が死んだ。一体誰が。

彼女は口を動かすと、小屋の隅を指さした。ランタンの映し出す影の奥の方に、球体の頭を持った人間が椅子に座っていた。内心、私はぎょっとしてしまい、立ちすくんだ。

影の内で人間が両肘に手を置き、気の遠くなる遅さで立ち上がった。そして、ようやく橙の明かりの下に姿を現した。潜水服を着た男だ。

彼は死人らしく振る舞おうと、喋りはしなかった。しかし、気さくにも不自由な潜水服を懸命に動かすと、私と女に握手を求めた。

私は握手をした。

女は死人と知り合いらしく、「久しぶりね」と微笑んで固い握手を交わした。

ヘルメットの奥は窺い知れなかったが、彼もきっと笑顔なのに違いない。

挨拶を終えると、潜水服の死人は小屋の外に出ていった。男は扉を開いたままにした。外は既に青くなくなってしまっていた。開け放たれた扉から彼を見ていると、死人は背中から倒れ込み、クレーターの底へと身を沈めてしまった。窪みに潜る瞬間、彼は私たちに手を振った。そういえば、膜には穴が空かないのではなかったのか。

私は女の顔を見て説明を請うのだった。

「鯨よ」

「彼は死んでも尚、鯨を研究し続けているの。湖の底に沈んでいるこの世で一番大きな生き物を」

窪みの表面には波紋が広がっている。気泡が浮かんでは弾けている。泡ぶくは、徐々に湖の中心の方に集中して現れるようになる。遠く小さくなっていく。どこまでも広がる同心円。静寂。「さて、わたしも用事を済ませないと」女は円窓を開けた。彼女の声は幾分、淋しげであった。「そういつまでも都合のいい日々は続かないものね」彼女は窓の外を見つめている。「だから

こそ、意味があるのかもしれないけれど。ねえ、素晴らしいと思わないかしら」

私は答えなかった。

「この街に、初めて夜が訪れるのよ」女はそう言った。

風が起った。小屋が突然震え始めた。

ドレスが風にそよいで、女の哀しい顔を隠してしまう。次第に風は突風へと移り変わっていく。扉や円窓がトタンを激しく打ち鳴らし始める。ランタンも更に激しく揺れ、灯りは消えてしまった。私の体内に灯るロウソクも吹き消されてしまいそうだ。彼女の髪の毛の先が微かに見える。映画の少年が、風船ごと大海原の彼方に吹き飛ばされていく。映画館を囲う炎は一層燃え上がる。暗いドレスが、窓から、扉から、小屋の四隅を貫通して、方々へ、外に伸びていく。森は怒りにざわめいている。

夜空が小屋一杯に溢れ、ひるがえる。滑らかで優しい暗闇に私も巻き込まれていく。心地良い、夜闇の渦に。

「帰る時間よ」

声だけが、独り、取り残された。

.....
私は窓際に立っていた。

部屋の中は暗く、窓の外から入るネオンの光が私の顔を赤、黄、青、緑と順々に染め上げていった。私が泊まっている安宿の看板のせいである。じじじと寿命の少なくなった電球が最期の断末魔らしき音を立てている。

真夜中。

酒場から出てきた酔いどれたちが空になった酒瓶を投げている。「くそつたれ」

瓶の割れる音と大げさな咳払い。怪しい、言葉になっていない会話。

向かいの雑居ビルのでっぺんには、体長十メートル以上はありそうな鯨の看板。

真夜中。

鯨はぴくりとも動かない。

酔っぱらいも次第に、危うい足取りで帰路につく。やがて通りには誰もいなくなった。粉々に砕けた瓶の破片の奴ら、街灯に照らされて、私の目玉を貫こうと息巻いていやがる。

真っ赤な眼をした白うさぎに、真っ青な眼をした白猫が追いかけている。つむじ風のように道路を横切っていく。

これは幻か。それとも。

私は右手で左の掌を触ってみた。汗をかいている。掌は、湿って滑りやすくなっている。

私はなにに怯えているのだろう。

私はなにに興奮しているのだ。

夜は訪れた。しかし、星は少なく空は濁っている。

窓辺に置いてある空の花瓶には埃が詰まっている。今朝食べ残した目玉焼きは、固まって既に干からびてしまっている。食べようという気も、捨てる気も起きない。テーブルに置いておく。傍らには執念深く燃え続ける吸いかけの煙草。

寒い。けれども私は汗をかいている。

髪から汗が滴り落ちた。

違う。私は濡れているのだ。全身、海から上がってきたばかりのように。風呂に入ったつもりはないのだが。

ふと、窓の外が黒くなった。一層部屋は暗闇に溶け込んだ。

眼が窓から私を見守っていた。優しい母の眼差しで。人間ではない、大きな瞳で。

じっと私を――じっと私を――左眼で。

やがて巨大な生物は身を翻し、尾ひれを私に向けた。左右対称の、白と黒のまだらの尾ひれである。

私はズボンのポケットに手を入れた。銅やアルミニウムでできた硬貨が手に握られていた。

これから朝が来るのだろうか。

白と黒のまだらの生物は遠のいていく。優雅に、しなやかに、ゆっくりと空へ向かって飛んで

いく。

ビルの看板にはもう、鯨はいない。

もっと遠くの空では、まだらを遥かに凌ぐ偉大な生物が空を目指して昇っていく。

私は慌てて窓を押さえつけた。窓は軋み、硝子が割れた。酒瓶と同じ末路を辿ったのだ。

大波がなだれ込んできた。私はたちまち奥の壁に叩き付けられ、引潮とともに外へと飛び出した。

息苦しさの中、私は心地よい夜風を感じとった。

夜風に乗って漂ってきたもの、それは、私の体内に身を隠していた小さな憧憬だった。

そして初めてやって来る朝を想い、期待に胸を躍らせた。私の肺は幸福で満たされた。

私が最後に見たのは

天から射す光に突き進む

二匹の鯨と

天から垂れる空洞の紐を

頭に繋げて泳ぐ

潜水服を着た私だった。

終わり

窓辺に見る夢

<http://p.booklog.jp/book/83396>

著者：大きな水

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ookinamizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83396>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83396>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ